

## 日本薬史学会が第6回柴田フォーラムを開催

### 2講演とホームムービー映写が行われた

日本薬史学会の第6回柴田フォーラムが2013年8月3日(土)、午後1時50分から東京大学薬学系研究科総合研究棟10階大会議室において猛暑のなか約60名が参加して開かれ、鳥越泰義評議員の司会により進められた。

最初に相見則郎・同フォーラム委員長から開会挨拶が行われ、引き続き①高橋 文先生(日本薬史学会名誉会員)の講演「18世紀日瑞の医学薬学の架け橋になったツェンベリー」、②朝比奈はるか先生(お茶の水女子大学生活環境研究室)のホームムービー映写「祖父朝比奈泰彦とその家族」、③米田該典先生(大阪大学大学院医学系研究科医学史料室)の講演「文化財の理化学調査の歩みと正倉院薬物の調査」の順で行われた。

高橋、米田両先生の講演は、これぞ薬史学の研究テーマの感を得た興味深いかつ格調の高い内容で、高橋先生はツェンベリーの業績を主に駆梅剤水銀水について医学薬学面から述べ、米田先生は正倉院薬物を通して往事の薬物事情と調査時の苦労を浮き彫りにし、それぞれ熱演された。また朝比奈先生から

は終戦直後の祖父・泰彦一家に関するホームムービーが紹介され、フロアーから「貴重なムービーだ」の声が寄せられた。講演会は5時過ぎ終了した。

引き続き、薬学図書館1階ロビーで行われた懇親会でも三澤美和副会長の開会挨拶の後、3先生を囲み、懇親の輪が広がった。

なお2講演とホームムービーの内容は、演者の執筆により「薬史学雑誌」(2013年12月発行)に掲載されるが、以下編集委員の聴講記録を速報的に記す。



会場風景

## 高橋 文先生の「18世紀日瑞の医学薬学の架け橋になったツェンベリー」を聴講して

編集委員 荒木二夫

最初に座長の宮本法子理事(東京薬科大学教授)から演者のツェンベリーに関する研究は、1970年

代にウプサラ大学に留学し、スウェーデン語を習得・駆使して同大学図書館や資料室、市内の古書店など

で資料を探し出した苦勞の賜物で、2013年度の日本薬史学会賞に輝く研究であり、今回の講演はその一端を示されたものであると紹介された。

長崎・出島にオランダ商館がおかれた江戸時代に商館付医師としておよそ100名が来日しているが、その中でケンペル(来日・1690年)、ツェンペリー(来日・1775年)、シーボルト(来日・1823年)の3名が有名である。いずれも出島や江戸への旅で好学の士に蘭学・医学を教えつつ調査研究を行い、日本社会や植物・動物などをヨーロッパに紹介したという共通点がある。演者は、このうちツェンペリー(Carl Peter Thunberg 1743-1828)に関する研究を永年にわたり進め、その成果を発表してこられたが、今回は彼の母校スウェーデン・ウプサラ大学の紹介と彼が日本で伝授した医療技術のうち、有益であった梅毒の水銀水療法について講演された。

ウプサラ大学は、1477年創立の名門大学で、1613～1620年に医学部が設立された。この医学部が充実・発展したのは、1740年にロセンステンが解剖学、生理学の教授、1741年にリンネが博物学、薬物学などの教授として就任した頃からである。ツェンペリーが在学したのは1761～1770年、リンネ教授らの指導で学位を取得。卒業後はパリで内科、外科、博物学の研鑽を積み、アムステルダムのオランダ東インド会社で外科医として勤務、南アフリカ、バタビアを経由して日本に向かった。

ツェンペリーが長崎に上陸したのは安永4年(1775)8月、オランダ商館付医師として約16ヶ月滞在した。殆どを出島で過ごし、商館長フェイトが徳川将軍に拝謁するため江戸参府の旅(約4ヶ月)に随行した。出島や江戸では最新の医療技術を日本人医師に伝授する傍ら、日本研究のため植物や貨幣などの採集も行った。参府の旅から半年後には、スウェーデンに帰国し、「日本植物誌」に続き「ヨーロッパ・アフリカ・アジア旅行記」(第1巻～第4巻)を刊行している。ちなみに日本に関する記述は第3巻および第4巻にあるが、その内容は高橋 文訳「ツェンペリーの江戸参府随行記」(平凡社)として広く出版された。

ツェンペリーは、後にウプサラ大学医学・植物学



高橋 文 先生

教授、王立科学アカデミー会長、同大学学長などを歴任し、学者としての実力が伺える。「日本植物誌」は、師リンネの分類法、命名法により日本固有の植物を紹介、わが国では本書により日本植物誌の近代化が行われたとされ、植物学会関係者の間ではツェンペリーは高く評価されている。

当時、日本では性病とくに梅毒が蔓延し、これに対する有効な治療法はなかった。ツェンペリーは1754年、ウィーン大学医学部長ファン・スウィーテンが公表した水銀水(Aqua mercurialis)を用いる治療法を教示したところ、大勢の患者が完全に治癒したと記録されている。演者はその処方内容や用法・用量についてウィーン大学研究所の当時の資料とツェンペリーから指導を受けた吉雄耕牛の「紅毛秘事記」の記録を提示し、①彼我の測量単位に違いはあるものの、グラム換算した水銀水の製剤が0.103%、0.104%とほぼ一致していること、②1回0.0156g、1日2回という用法・用量に違いはないことを明確に示した。

また、この製剤は1835年のポルトガル薬局方、1837年フランス薬局方に掲載され1937年まで継続収載されたこと、日本薬局方でも初版から第5局まで駆梅用内用昇汞として、その用量で収載されていたことも示した。ツェンペリーがもたらした水銀水は最新かつ有効な治療薬で、昭和年代になっても駆梅剤、消毒剤として使用されてきたことを考えると改めてツェンペリーの功績に対して頭が下がる思いである。

## 米田該典先生の「文化財の理化学調査の歩みと正倉院薬物の調査」を聴いて

編集委員 小清水敏昌

最初に座長の指田豊先生(東京薬科大学名誉教授)から演者の紹介があった。米田先生は昭和42年に大阪大学薬学部を卒業、以来 生薬の研究に長年取り組んでおられ本会の学会賞(第2回)を授与された。最近は香料の研究も手掛けておられると紹介。

正倉院といえば、奈良時代の貴重な陶磁器、染織品、生薬などが収められ、建物は北倉、中倉、南倉とに分かれている。演者は収納されている薬物類について、過去2回の大規模な調査報告書から、薬学的見地に立って生薬の分析などを中心に述べた。

最初に「文化財とは」のスライドでその解釈や課題などを解説。従来は文化財ということで、珍貴であることが求められていた。こうした文化財に関する研究をながめてみると、法隆寺の壁画の調査が理化学的な研究の本格的な始まりであったという。明治の頃でも材質調査は青銅の分析から始まったものの、研究者が外国人だったためその発表はニューヨークでなされた由。更に、文化財の調査に関して歴史的に貢献した人たちについても述べた。

正倉院に存在しているもののうち、驚いたことにわが国で調達できるものは国産の物を用いていたという。薬物などは当時の遣唐使の交流やシルクロードなどを經由してわが国に持ち込まれたものである。また、1900年代初期に仏教研究の資料を探すために蒙古など中央アジアに派遣された大谷調査隊によって学術的な資料がわが国に搬入され、その研究によって いわゆる文化財研究の下地ができた。正倉院の薬物を初めて本格的に調査したのは本草学が専門の中尾万三であった。

第一次の薬物調査は戦後まもない昭和23年に行われ、調査報告書を昭和30年に「正倉院薬物調査」として公表。この中には調査した59品目の生薬類の調査結果があり、また この調査の過程を映画に撮り全3巻を完成させ国民に広く公開した。写真集も同時に作成した。研究班長は朝比奈泰彦先生であった。調査団は第一次薬物調査の追補として化学



米田該典 先生

成分の分析を行い、みごとにその成果を上げた。すなわち、大黄(センノシド) 人參(ニンジンサポニン) 甘草(グリチルリチン)の存在の確認と定量ができたことであり、わが国の薬学の分析能力が大いに評価されたという。

第2次薬物調査は平成6年から7年にかけて班長の柴田承二先生の下で行われた。「柴田フォーラム」の命名の由来である。化学分析の実施上での課題として微量分析は可能か、非破壊的検査が望ましいが、それで分析ができるのか、などが検討された。その報告書には柴田先生の意向を受けカラー写真が多く含まれているので分かり易い。タイトルは「図説 正倉院の薬物調査」となっている。これらのスライドのほか、調査の様子などのスライドを提示し解説したので、往時の調査の雰囲気が感じられた。

最後に演者は、これらの正倉院の調査から香料成分の研究の結果について簡単に紹介した。1300年以上も経過した何キログラムもある樹木から芳香成分について分析した。このうち「沈香」「全浅香」は香りが良い、これらについて分析し構造式まで決定した苦労話を述べ、これら香りのある正倉院の物がどこからわが国に入ってきたかを調査するためインドシナ半島を重点的に訪問した。結果、どうもベトナムからラオスにかけての山岳地帯に産することが判明したという。今後、第三次調査を行うとすると、

何を調べ、どうやって実施するのが問題ではないか、特に機器分析用機材が現代では飛躍的に発達しているのでは、前2回の結果と同等には比較できないのではないか、など課題を述べ講演を終えた。

秘密のベールに覆われていた1300年以上前の正

倉院の貴重品を取り出し、微量分析をした話は大変興味深い内容で、60名ほどが参加した会場内は米田先生の話にじっと耳を傾けていた。大陸から持ち込まれた大昔の生薬に一体何が含まれているのかなど、その分析調査にはロマンを感じた。

## 朝比奈はるか先生の「祖父朝比奈泰彦とその家族」(映写)を鑑賞して

編集委員長 西川 隆

お孫さんである、はるか先生の説明を交えながら紹介されたこのホームムービーは、薬史学会初代会長で東大名誉教授・朝比奈泰彦先生ご一家の戦災を免れた終戦直後(1945～1955年頃)の貴重な家庭生活の記録である。何もかも不足する戦後混乱期のなか、フィルムなど撮影用の機材を所有していたことにまず驚かされるが、これも米軍機の空襲による自宅焼失を受けなかったことによるものと思った。

撮影は、二男の菊雄先生(故人・元新潟薬科大学学長、はるかさんの父君)がカメラを廻し、泰彦先生が鍬や鎌を握ってカボチャ、ジャガイモを家庭菜園で作り、少しでも食糧不足を補おうとする姿を見て、当時を知る年配の会員には格別ほろ苦い懐かし



朝比奈はるか 先生

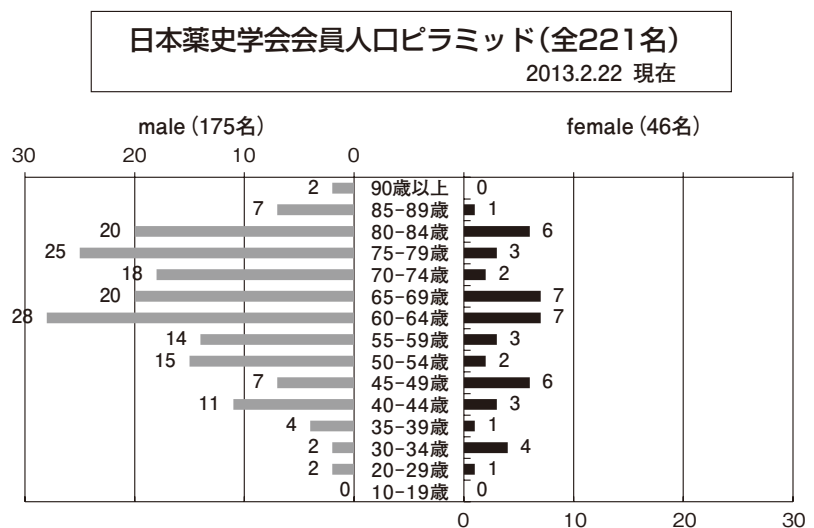
い内容であったろう。

(写真はいずれも五位野政彦理事の提供による)

## 日本薬史学会会員人口ピラミッド

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

現在の日本薬史学会の会員名簿は2011年11月に冊子として発行されたものである。その前は1999年6月発行の薬史学雑誌第34巻1号の中に入った形で発行されていた。2011年名簿は、当時の財務会員管理担当常任理事の高橋 文らのご尽力により行われたアンケート調査に基づき作成され、その折に会員には生年月日も記入していただいた。2012年末からは、新会員入会申し込みの方法も、従来の簡単なはがきによるもの



から、リニューアルされた学会 website から入会申込みをプリントして fax などでする方式となり、そこには生年月日の項がある。図は、それらに基づき作成し、2013年4月20日(土)の本学会理事・評議

員会で配布したものである。一般会員282名+学生会員15名=297名より、年齢不詳会員76名(25.6%)を除く計221名を対象とした。性別は氏名より判断した。今後の学会活動の参考となれば幸いである。

## 日本薬史学会2013年会(札幌)のご案内

年会長：吉沢逸雄(北海道支部 支部長代行)

日本薬史学会2013年会は、10月5日(土)札幌市内にある北海道医療大学サテライトキャンパス(札幌市中央区北4条西5丁目)で開催されます。JR札幌駅の南口前にあるビル「アステイ45」の12階が会場です。

さて、いよいよ年会の概要が見えてきました。年会実行委員会(委員長：関川彬)の報告をもとにその一端をご紹介します。学会の目玉とも云える特別講演では、北海道医療大学の新川学長による興味深いお話しが拝聴できるはず。口頭発表による一般講演にはいろんな領域の12演題が集まり、例年より少ない件数となりましたが、活発なご討論で盛り上げて欲しいものです。9月末には要旨集も出来上がる予定、最後の点検を怠ることなく10月5日を迎えられると楽しみにしております。

### 年会プログラム

受付(9:30~)

【進行係：小松健一】

ご挨拶(10:00~10:10)

- ・日本薬史学会2013年会を札幌で迎えるにあたって
- ・2013年会の開催にあたって

日本薬史学会 会長 津谷喜一郎  
2013年会 年会長 吉沢逸雄

演題1~2(10:15~10:47)

【座長：島森美光】

1. ホメオパシーの設立者サミュエル・ハーネマンの生涯

○ミハエラ・シェルブレア(東京大学大学院 薬学系研究科・医薬政策学)

2. Gaperl について - オランダの薬店の看板

○石田純郎(岡山大学・医学部)

演題3~4(10:49~11:21)

【座長：本間克明】

3. 天保飢饉における石見銀山領の救荒・疫病対策について

○成田研一(島根県薬剤師会江津・邑智支部)

4. バウアー写本におけるハリータキーの記述について

夏目葉子(名城大学大学院・薬学研究科)

**演題5 (11:23 ~ 11:38)**

**【座長：八木直美】**

5. 日向薬(くすり)事始め(その15)、-日向における種痘の歴史-再考(Ⅲ)

若山健海著、嘉永西載「種痘人名録」について

○山本郁男<sup>1)</sup>、岸信行<sup>2,3)</sup>、高村徳人<sup>2,4)</sup>、宇佐見則行<sup>5)</sup>

(<sup>1)</sup>前・九州保健福祉大学薬学部、<sup>2)</sup>九州保健福祉大学 QOL研究機構、

<sup>3)</sup>宮崎・日向・富高薬局、<sup>4)</sup>九州保健福祉大学薬学部、<sup>5)</sup>奥羽大学薬学部)

**昼食・休憩 (12:00 ~ 13:30)**

**日本薬史学会理事・評議員合同会議 (12:10 ~ 13:10)**

**年会場**

**演題6 (13:30 ~ 13:45)**

**【座長：西部三省】**

6. 韓国の薬研の歴史

○奥田潤<sup>1)</sup>、金快正<sup>2)</sup>、李京録<sup>3)</sup> (<sup>1)</sup>名城大学・薬学部、<sup>2)</sup>許浚博物館、<sup>3)</sup>韓独医薬博物館)

**特別講演 (14:00 ~ 15:00)**

**【座長：吉沢逸雄】**

**演者：北海道医療大学 学長 新川詔夫 先生**

**演題：ヒト耳あか型遺伝子の発見とその医学的・薬理的・人類学的意義**

**演題7 ~ 8 (15:15 ~ 15:47)**

**【座長：高橋保志】**

7. 医薬品の一般名に関する考察(2) 受容体関連薬物の名称

○三澤美和(日本薬科大学)

8. 医療費の抑制と薬価基準の見直しの経緯 - 1985 ~ 2010 にかけての薬価制度論議の経緯 -

○横山亮一、松本和男(日本薬史学会会員)

**演題9 ~ 10 (15:49 ~ 16:21)**

**【座長：関川彬】**

9. 「福音書」に基づく病(やまい)と癒やしについて

伊藤あゆみ、○野々垣常正(金城学院大学薬学部)

10. 英国における The School of Pharmacy の創設とその背景について

○柳沢波香(津田塾大学非常勤講師・青山学院大学兼任講師)

**演題11 ~ 12 (16:23 ~ 16:55)**

**【座長：富所謙吉】**

11. 大分県近代薬学史年表作成のためのメモ(1)明治編

○五位野政彦(東京海道病院 薬剤科)

12. 後志の薬史(人物編)

「アスパラガスの父」と称えられる薬剤師；下田喜久三とその生涯

○小松健一<sup>1)</sup>、島森美光<sup>1)</sup>、西川隆<sup>2)</sup>、吉沢逸雄<sup>2)</sup> (<sup>1)</sup>北海道薬科大学、<sup>2)</sup>日本薬史学会)

**2014年度年会長の挨拶 (17:00 ~)**

**笹栗俊之(九州大学・医学部)**

懇親会 (17:45～)

年会終了後は、京王プラザホテル(周辺地図参照)に移動します。懇親会の会場は同ホテルの1階です。

アナウンスメント

①参加費

年会：会員(予約4,000円、当日5,000円)、非会員(6,000円)、学生(1,000円)

懇親会：会員・非会員(5,000円)、学生(1,000円)。

②年会事務局・会場

・年会事務局：北海道薬科大学薬理学分野、047-0264 小樽市桂岡町7-1、小松健一

電話：0134-62-1824、Fax：0134-62-5161、Email：komatsu@hokuyakudai.ac.jp

・年会会場：アスティ45ビル(12階)：札幌市中央区北4条西5丁目

電話：011-223-0205、Fax：011-223-0207

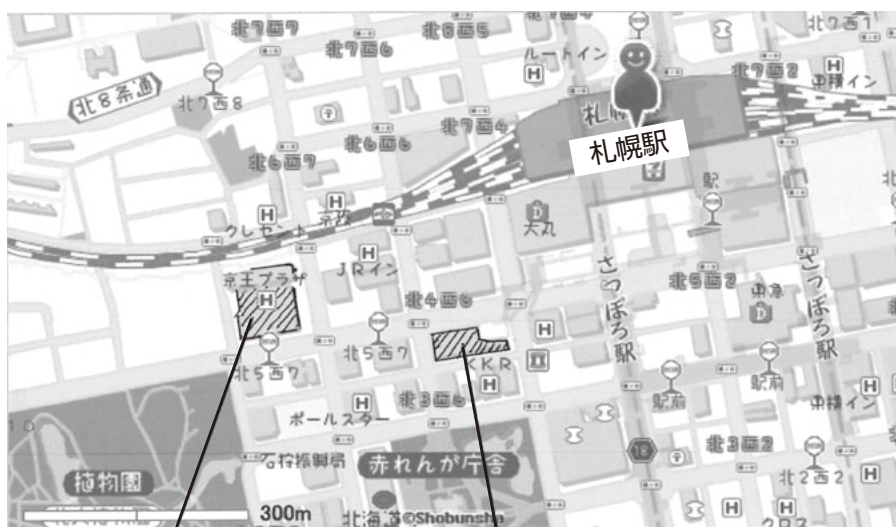
③参加申込み方法

次頁の申込書を郵送またはFaxにてお送り頂くか、申込書と同様の項目記載のうえE-mailにて送ってください。すでに参加申込みを終えた方は再度の申込みは不要です。参加申込書の送付先は年会事務局(小松健一)で、締切りは9月28日とします。それ以降は年会当日とします。理事・評議員合同会議の昼食に弁当をご希望の先生は、予約をして下さい。代金は1,000円です。

④口頭発表に関するご案内

発表の時間は質疑応答を含め15分、これに発表者・座長の交代ぶんの2分が加わり、合計17分となります。ノートパソコンはこちらで用意しますが、特殊な使用法は対応しかねますので、ご注意ください。ご発表の方は10月2日(水)まで事務局に送ってください。当日ご持参の場合は、発表1時間前までにお持ちください。

JR札幌駅周辺の地図



京王プラザホテル札幌

アスティ45

# 日本薬史学会 2013 年会(札幌)

参加申込書 FAX : 0134-62-5161

\* 申込期限 2013年9月28日

フリガナ	
①氏名	
②所属	
③住所 〒	
④ TEL	⑤ FAX
⑥ E-mail	
⑦参加費 (○で囲んでください。参加費は当日受付にて徴収いたします。)	
1. 年会	2. 懇親会
会員 (予約)                      4,000円	会員・非会員                      5,000円
会員 (当日)                      5,000円	学生                                  1,000円
非会員                              6,000円	
学生                                 1,000円	



## 中部支部の設立のお知らせ

日本薬史学会中部支部長 河村典久

日本薬史学会中部支部の設立が4月の薬史学会総会において承認されましたことは、すでに6月発行の本薬史レター 67号においてお知らせしたところです。

中部支部は、これまでの東海支部(愛知、岐阜、三重、静岡)として活動してまいりましたが、北陸・信越地区(福井、石川、富山、長野)を含める広域の薬史学会員の皆さんのより参加しやすくするためのものとして発足したものであります。

東海支部の活動として、秋(11月ないし12月)と春(3月)に例会、総会を開催し、それぞれ講演会を行って参りましたが、北陸地区の会員の皆さんに対しては、地区による講演会の開催が困難でありました。中部支部の設立後は北陸地区の会員の皆さんも容易に参加できるようにと、講演会などを東海地区と北陸地区において交互に開催するようにと計画しているところです。

北陸地区の薬史学会員数は、会員名簿の勤務され

ている地区あるいは住所によりますと、石川県には8名、富山県には14名の会員、ほかに新潟・長野県には3名の会員がおられます。中部支部設立に際して金沢大学の御影先生と、富山大学の小松先生との打合せを行った結果、北陸・信越地区のお世話を両先生にお願いすることになりました。

支部の活動経費としては、本部より支給される支部活動費(従来までは1支部2万円)で活動してまいりましたが、そのほとんどが講演会費用として支出され、通信費としては使用できない状況であり、事務的経費はこれまでのお世話を頂いた名城大学にお願いしてまいりました。

このような状況下でするので、出来るだけ経費節減のために中部支部の会員の皆さんには、出来るだけ迅速に薬史レターにおいてお知らせする予定ですが、すでに薬史学会に登録されている会員には可能な限りメールにてもお知らせしたいと考えております。

## 中部支部例会の講演会案内と演題の募集

日本薬史学会中部支部例会を下記の要領で開催しますので、会員の皆さんのご参加、ご発表をお願いいたします。なお、発表を希望される方は、演題、発表者等を10月19日(土)までに中部支部事務局にお知らせください。

**開催日時:** 2013年11月17日(日) 14:00-16:00

**開催場所:** 名城大学名駅サテライト・多目的室(名古屋市中村区名駅3-26-8 名古屋駅前桜通りビル13階 名古屋駅ユニモール地下街④番出口を出てすぐ)

**講 演:** 『伊藤圭介と植物図説雑纂』河村典久

**研究発表演題申し込み締め切り:** 2013年10月19日(土)

事務局

日本薬史学会・中部支部事務局長 飯田耕太郎

名城大学薬学部 薬学教育開発センター

教育 開発部門

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL: 052-839-2710 (直通)

FAX: 052-834-8090

E-mail: iida@meijo-u.ac.jp

## ブルガリア・プロヴディフの薬局博物館

日本薬史学会評議員 石田純郎

人口38万人のプロヴディフ(Plovdiv)は、ブルガリア第二の都市で、古代ローマ遺跡がたくさん残る旧市街に、小さな薬局博物館がある。Old Hippocrates Pharmacy, Apteka は、ul Saborna通り16番地にある。古代ローマ時代の城砦址へ上る参道の東側に面する。ガイドブック 'lonely planet' には、めったに開館しないと記載されていたが、6月7日に訪問した時には開いていた。2階が1階よりせり出た構造の建物で、外観にヒポクラテス、ア

スクレピオス、ヒギエイアのレリーフが飾られている。後2者のレリーフは中欧の薬局の外壁によく飾られているが、3者揃ったレリーフは珍しい。

内部は19世紀を想定した薬局博物館で、入場料は5レヴァ(350円)。陶器製、ガラス製の薬瓶、薬局カウンター、薬秤、乳鉢、ヒポクラテス、アスクレピオス、ヒギエイアの胸像が飾られている。2階は19世紀の医師の診療所を想定して、復元されている。薬史、医史史料も展示されている。



Old Hippocrates Pharmacy, Apteka の全景



外観に飾られたヒポクラテス、ヒギエイア、アスクレピオスのレリーフ



Old Hippocrates Pharmacy, Apteka の入口



拡大したヒギエイアのレリーフ

# わが国の医療関連団体など創立年

日本薬史学会常任理事 五位野政彦

2013（平成25）年は日本薬剤師会創立120周年記念の年である。そこで今回医療関連団体などの創立年を調査した。その結果を表に示す。

利用した資料は次のものである。①日本薬剤師会史 1973、②日本薬学会百年史 1982、③東京薬科大学九十年 1970、④薬学雑誌 1893、第131号～第142号。

この表からはわが国の薬学関連団体は他の医療分野に比べて比較的早い時期に全国規模の組織化が行われたことがわかる。また他組織が当時の世情を反映して「大日本」「帝国」などの名称を冠しているのに対し、薬学薬業関連団体は「日本」という表現をとっていることが興味深い。なぜなのだろうか。

## 表

1869（明治2）年	大阪舎密局開講
1870（明治3）年	売薬取締規則施行
1871（明治4）年	『軍医寮局方』刊行
1873（明治6）年	第一大学医学校製薬学科（現東京大学薬学部）設立
1874（明治7）年	東京司薬場（現国立医薬品食品衛生研究所）創立
1877（明治10）年	売薬規則公布
1877（明治10）年	博愛社（現日本赤十字社）創立
1879（明治12）年	東京薬舗会設立
1880（明治13）年	日本薬学会（の前身団体）創立
1880（明治13）年	東京薬舗学校（現東京薬科大学）創立
1885（明治18）年	東京医会（後の帝国連合医会）発足
1885（明治18）年	大日本獣医会創立
1887（明治20）年	『日本薬局方』施行
1889（明治22）年	薬律（薬品営業並薬品取扱規則）公布
1890（明治23）年	日本薬剤師連合会設立
1893（明治26）年	日本薬剤師会創立（6.11）
1902（明治35）年	日本聯合医学会（現日本医学会）創立
1903（明治36）年	大日本歯科医会創立
1916（大正5）年	大日本医師会創立
1927（昭和2）年	日本産婆会設立（現日本看護協会の前身のひとつ）

## 編集委員会からのお願い

- 著作権の委譲**：薬史学雑誌掲載論文の著作権を、日本薬史学会に委譲することについてご承諾をいただけない場合は、お手数ですがその旨を2013年12月31日までに、事務局宛書面または電子メールにてご連絡下さいますよう、お願いいたします。詳細は、薬史学雑誌（第48巻第1号）または薬史レター（第67号）をご参照下さい。
- 薬史レターへの投稿**：薬史に関するエピソードをはじめニュースやBook紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。紹介の図書は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号（第69号）は2013年12月発行予定（締め切りは10月末日）です。

## 薬史往来

# フランス・ヴィシーで考えさせられた 薬物輸送システムの薬史

日本薬史学会評議員 ヨング・ジュリア

「最新」とされている医療技術の多くは、それほど新しくないと思う。遡れば過去にもその技術は、発想として存在することが多い。なぜなら、昔の人は現代人と同様、日常的に風邪、頭痛、消化不良などという病に悩まされ、良い治療法、特効薬を追求してきた。その意味で過去と現在の人間は、病という共通点で結びついていると思う。過去と現在の共通性が薬史研究の面白さの一つであると考え、学びつづけている。最近注目される DDS (Drug Delivery System、薬物輸送システム) は、その一例である。それに気付いたのは、2011年にフランス中部の小さな町のヴィシーを訪れた時であった。

ヴィシーの名物は、何ととっても水である。ヴィシーの天然微炭酸水は世界中に輸出され、日本でも大手食品会社が販売している。ヴィシー水にミネラルが多く含まれているため、健康に良好、さらに天然微炭酸が美しい肌を保つのに良いという。ヴィシー市内には多数の鉱泉・温泉があるが、その天然水にはアルカリ塩(重炭酸ナトリウム)成分が多く含まれ、さらに炭酸カルシウム、炭酸マグネシウムも豊富である。ヴィシー水は、肝臓、腸、膵臓などの病に効果があることが広く知られている。

公衆浴場を楽しんだローマ人は、古くからヴィシー水を使用した。ナポレオン3世(1808~1873)は、定期的に湯治療養のため、ヴィシーを訪ねた。パリからの利便性をはかるため、駅

を建設し、そして退屈を防ぐために庭園、劇場、カジノなどの娯楽施設を作り都市化した。ナポレオン3世をはじめ、ヨーロッパ中でヴィシーの温泉・鉱泉療養の知名度が高まり、名水として高い評価を得た。

ご存知のとおり、日本も温泉地が多く、癒しや健康維持によく利用されている。いうまでもなく日本流の温泉水の「薬物輸送システム」は入浴である。ミネラルなどの成分が肌に浸透し体内に運ばれ、健康を保つという仕組みである。一方、ヴィシーでは入浴は決して一般的な治療法ではない。患者は、まず医師を訪ね、処方箋をもらい、医師にすすめられた鉱泉(あるいは温泉)水を一日何回か飲む。飲用を繰り返しながら、一ヶ月ほどホテルで湯治する。

ヴィシーは、パリに便利で宿泊施設が多い特徴から、世界大戦中、ドイツ軍の駐屯地となった。その歴史的背景により、フランス人の間ではヴィシーのイメージは悪い。また、ヴィシー水の確かな効果があるにも関わらず、健康維持のため、一ヶ月間仕事を休めるフランス人は少なくなったので、療養地として人気低迷に陥ってしまった。ヴィシーは経済面で問題を抱えているが、昔からある名水を使用して最新の医療技術(薬物輸送システム)、すなわち日本流の入浴スタイルの開発・広報に力を注げば、以前栄えたヴィシー経済の特効薬になるのではないかと思う。(法政大学経済学部教授)

### 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第68号 2013年9月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>